

ユッカの会会報 第26号 平成27年1月15日発行

ユッカの会代表：中 和子 連絡先：横浜市戸塚区上倉田町 2040-121

沼波万里子さんの思い出

星ノブ

長い間「ユッカの会」の代表としてつくして下さった沼波さんが、昨年、91才でなくなられた。



「ユッカの会」が誕生した背景には沼波さんの旧満州からの引き揚げ体験があると思う。旧満州で終戦を迎え、その後の混乱の中でご主人が死去、引き揚げの途中で1才の長女も死亡した。

大小の骨壺二つ狂乱の

姑に声なく額伏して詫ぶ

歌人である沼波さんはその時の状況を短歌で表現しておられる。夫と娘がなくなったのは沼波さんのせいではない。沼波さんも犠牲者なのだ。

もはや婚家にとどまるわけにはいかない。生きてゆくために、駐留軍（米軍）の家庭に住み込みのハウスキーパーとなった。つい昨日まで敵国であった国の人々のパンツまで洗うのか（当時洗濯機などなかった）と、屈辱の日々が続いた。あるとき、ふと鏡の中の自分の顔を見て愕然とする。20代半ばの若さなのに、まるで老婆のよ

うではないか。このままではいけない。そうだ、英語を身につけよう。沼波さんに転機が訪れた。自分が変われば人も変わる。その家の奥さんも積極的に協力してくれた。そして英語を習得した沼波さんは英文オペレーターの仕事を得て自立する。

そのころ、旧満州から引き揚げてきた人たちの間に、自分たちの体験を記録に残そうという運動が起こり、その記録はやがて「凍土からの声」という名称で出版され、大きな反響を呼んだ。沼波さんも勿論参加している。その後「凍土の会」という組織が作られ、旧満州に残された人々をよびもどそうという運動に発展していった。特に親と別れ別れになった幼い子供たちを、早く親のもとにかえたいという思いが強かったようだ。沼波さんも中心になってめざましい活動をしておられる。

やがて、残留孤児といわれるこの人達が永住帰国することになったが、戦後40年近い年月が過ぎていて、孤児たちも中年という年頃になっていた。

「1才でなくなった私の娘も生きていればこの年頃だったのだ」と沼波さんは思われたという。



その後帰国者はふえ続け、この人達が自立して生活してゆけるように、相談役として「自立指導員」の制度が設けられ、沼波さんも率先してこの役についた。

孤児たちは大抵、配偶者と未成年の子供を伴っていた。この人達の就職のこと就学の事、指導員たちも必死の努力であった。一番の問題は言葉が通じないことにあるときづいて、団地の集会室などを借りて日本語の勉強が始まった。組織を作って広く呼びかけようということになった。9人の発起人が名を連ねて「ユッカの会」が誕生した。「ユッカの会」という名称も発起人の一人である若い男性の発案によるものであるという。「横浜市内に住んでいて、何かと便利だということで、私が代表となっただけなのよ」と沼波さんはおっしゃっていたが、誰から見てもこの役にふさわしい人だったのだと思う。

「不幸が私を変えた。不幸のおかげです。そうでなかったら・・・」と沼波さんは言っておられる。時代のせいだと思いがけない不幸に出合った。けれども挫けることなく、前向きで行動的で、率先して活動された。とても真似はできないが、生きてゆく上で勇気を与えてもらえる。

もっといろんなことをお聞きしておけばよかったのと思う。高名な国文学者であるお父上のこと、北一輝のこと、沼波さんの少女時代のこと、短歌のことなど、今となっては書き残されたもので足跡をたどるしかない。

「ユッカの会」を通して沼波さんのという大先輩にめぐりあえてよかったと感謝しています。ありがとうございました。

振り向かず今日あることの幸を
年あらたまる空に祈らむ
(沼波さんの歌集「青苔の道」より)

(2014年12月 寄稿)

ミニtrip

杉山智子

今年の8月25日私は日帰りバスツアーに参加しました。

朝7時20分に中央林間駅東急ストア前に集合して出発しました。途中バスは圏央道を走り速くてスムーズでした。圏央道(相模原愛川IC～高尾山IC間)は6月28日に開通して、神奈川県内から群馬県方面へアクセスが良くなりました。

10時すぎ「おぎのや特製弁当」をもらってバスの中で昼食を食べました。とてもおいしかったです。

11時前富岡製糸場に着き見学がはじまりました。富岡製糸場は明治5年に官営模範工場として群馬県富岡に設立されました。約1万5千坪の敷地内に、開設当時の東西繭倉庫、繰糸場(繰糸場内に現存する明治5年当初に使われていたフランス式繰糸機(復元機)も展示)、事務所、診療所、病室、外人宿舎など煉瓦の建造物がそのまま残っており、非常に重要な近代化遺産として知られています。

12時半に熊ノ平駐車場に着き、それから遊歩道アプトの道を熊ノ平～碓氷湖へと散策しました。トンネル10号から1号まで通



りましたが、6号トンネルと5号トンネルの間の日本最大級のレンガ造りのアーチ橋、国の重要文化財のめがね橋を渡りました。この橋は遠いところから見ると“めがね”の形に見え本当に素晴らしい景色でした。



碓氷湖の左側に人口の坂本ダムがあり、湖は一周1.2Km、所要時間20分です。私はこの湖に沿って二つの橋を渡って歩きながら、新鮮な空気を吸い、樺色の橋、緑の山林、青い空と湖、魚を釣っている人、ボートにのっている人などを見て、頭の中に美しい絵を思い浮かべました。気持ちがとてもよくなりました。



14時30分に帰りのバスは出発しました。車窓から目にした色々な光景を私は忘れることはないでしょう。

17時50分中央林間駅に着きました。この旅はミニtripでしたが私にとってはとても楽しい旅でした。

明治神宮へ行きました

張 曉妹

10月18日(土)私は主人と一緒に明治神宮に行きました。その日はとても良い天気でした。鳥居をくぐって中に入ったら、まずとても広いところだと感じました。大木が多くて、緑がいっぱいです！



その日、日本の伝統的な結婚式を見ることができました。男性も女性も日本の着物を着ていました。私は初めて着物を見ました。花嫁は上から下まで、もちろん顔も全部真っ白でした。白には結婚したら旦那様の色に染まるという意味があるそうです。

中国の一般的な結婚式は自宅かホテルなどで開かれます。花嫁は最初の結婚式の時は白いウエディングドレスを着ます。白は“純潔”を表します。中国の女性は結婚後も仕事を続けるので独立していますから“白”には“あなたの色に染まる”という意味はまったくありません。もし離婚したら二回目の結婚式の時はピンクのドレスを着ます。男性は一回目も2回目も同じ服です。

生け花の展覧会も見ました。非常にきれいでした。たくさん勉強しないとできないと思いました。

日本の寺院や神社の雰囲気は中国とは全然違います。私は明治神宮のように静かなところが好きなので、又こういう雰囲気のところを探して、行ってみたいと思います。伊勢神宮とか出雲大社などです。

ウイグル旅行 (2014年8月)

加納正三

ウイグルの結婚式へ行った時の写真を少し。肝心の結婚式はカメラが悪いのか暗くてみんな真っ黒。

東京から3時間半で北京、4時間ほど待って、再び4時間半程飛行機に乗ってウルムチ着。新疆は今回が3度目。20年前、10年前そして今度。

ウルムチでの結婚式に出たから、トルファン、カシュガルへ行ってきました。ウルムチは朝晩18度ほど昼でも30度にならず、朝晩は特に寒い。しかしウルムチから2時間半のトルファンは昼には40度を越え、火焰山はまさに火の山でした。

情況

街はどこも小銃を構えた警察が警備し、雰囲気はよくない。けれど人々の生活は普通(当たり前だけ)。私も今回は暴動やウイグル人射殺の件を余り話題にしなかった。

ウイグル族といってもヨーロッパ人みたいな人、アラブ人、漢族、日本人みたいな人と顔はいろいろ。

ウルムチは高層ビルの建ち並んだ大都市、他の二つは街の一部にウイグルの旧市街の残った地方都市って感じ。しかし10年前20年前とは全く様相が違う。都市化の速度が

速い。カシュガルはウイグルの多い都市で、漢族とお互いに交流が少なく仲悪そう。



ウイグルの美女達



街角にて

結婚式

披露宴は夕方から3時間ほど。彼らの披露宴は2回。昼間に新婦側の関係者の披露宴がある。

それが終わると夕方新郎側の披露宴。新婦の両親も含めて新婦側の関係者はもう誰も出ない。

私の参加した新郎側のパーティーには700人位が参加していました。新婦側の披露宴もだいたい同じくらいだから、ものすごい。

70の大円卓、一つの円卓に10人座る。円卓の真ん中に料理が置かれ、各人自分の皿にとる中国一般のやり方。日本のような司会者によるあいさつとか 新郎新婦紹介

とかスピーチとか一切ない。大体両親はじめ兄弟親しい親戚、友人はみな座らず客を案内をしたり、世話をしたりしている。

ウイグルは踊りが好きで何回となく中央でみんなが踊る。

私は家族か知人の傍に座れるのかと考えていたけれどそれはなし。ウイグルのおじいさんたちのグループのテーブルに座らされる。みんなウイグル語で盛り上がっている。私一人30分ほど所在なし。やっとウイグル語の片言で話しかけ仲間入り、あとは中国語でなんとか。乾杯の連続でお酒が大分入り盛り上がり。ちなみにイスラム教徒の彼らはとても酒が好き、聞いたらムハンマドは酒を飲んではいけないとは言っていないが、酒を飲んでけんか、乱暴をはたらく者が多く、後の人が禁止にしたと言っていました。

最後に両親と新郎新婦が向き合って挨拶し、終わり。



結婚式のテーブル

旅行

トルファン、カシュガル共にそれぞれ地元の友達の友達の友達が案内してくれた。彼らは友達や親戚関係が非常に濃い。非常

に親切で友達の友達の友達でも私を自分の友人の様に歓待する。いらないと言うのにワインやら香水やらの土産物まで。トルファンではヨルダンの死海に次いで海拔が低い塩湖を20年ぶりに見に行った。・・・なんと湖がない。



友達の友達の友達と塩湖で

20年前には周りを巨大な塩の層に囲まれた塩湖があって製塩工場があったけど、今は干上がってない、塩の層もない。何にもない。小さな池があるだけ。ウズベキスタンのアラル海みたいなもんか。

カシュガルではホテルのフロントの漢族の女性たちにウイグル料理のレストランを聞いたら、誰も知らない、食べたことがないと言う。僅か200m先に広大なウイグル人街があるのに。

しかたなく一人で街に入るが、案の定レストランが見つからない。そこで立ち話をしている老人たちに近寄る、胡散臭そうな顔をして私を見る。そこで私はたどたどし

いウイグル語で道を尋ね、日本人だというと、途端にみんな笑顔になって、手を引っ張ってレストランまで連れて行く。

ちなみにウイグル語はトルコ語の祖先、親戚で非常に似ている。トルコ語を勉強していたおかげで比較的早く覚えられた。といってももちろん初級レベルだけ。



カシュガルのモスク



カシュガルの公園にて

中国政府のウイグル政策の為にいま新疆では日本人の旅行客をほとんど見ないし、漢族の旅行客も激減だそうです。

これから新疆はどうなるんでしょう？

“私の夢”

陳 思明



私が一番好きな観光地はハワイです。

ハワイの気候は一年を通して常に温暖です。

ハワイは神様が創った美しい島と伝えられていて、自然が豊かな観光地です。私の故郷吉林省の冬はとても寒いので、暖かいハワイに家族で行ってみたいです。故郷の母も一緒に行かれたら、とてもうれしいです。父は中国の海南島に行ったことがあり、その時とても暑くて真っ黒に日焼けしてしまったので、暑いところにはもう行きたくないと言っています。吉林省の人は日焼けの習慣がありません。

私は大好きなハワイにいつか母と二人で行ってみたいです。母にきれいな海を見せてあげるのが私の夢です。



中国語と私

水本 みゆき



2004年の春ころだったと思う。会社で仕事中の主人から電話がかかってきた。「海外駐在希望の話なんだけど、中国でもいい？」数年前から海外駐在の希望は出していた。でも私も主人もイメージに合ったのは欧米で、「中国??？」と私の頭の中は「？」でいっぱい。「まあ、何事も経験だし、いいんじゃない」と答えたのが、私と中国との関係の最初の一步だった。

その後あつという間に主人の中国赴任は決定し、先輩駐在員の奥様や担当の不動産屋さんにいろいろ教えてもらいながら私も準備した。何しろ、3歳と5歳の娘を連れての中国暮らし。買い物は？病院は？と不安は尽きない。おまけに、知っている中国語は「ニーハオ」と「シェイシェイ」のたった二つ。やっと幼稚園に慣れた長女も転園（それも中国へ！！）しなければならない。今思えば、よく付いて行ったと自分でも感心する。実際、北京には日本系の幼稚園がいくつかあり、もちろん日本人学校もある。私たちが住んだマンションも住人の8割以上が日本人という恵まれた（？）環境で、子供たちは全く中国語を必要としない生活だったのだけれど。

会社で事前に語学研修を受けた主人と違い、私は中国語を勉強する閑もなく中国へ行くことになった。2005年4月、相変わらず中国語は2語しかわからないまま私の中国生活は始まった。

飛行機を降りて、まず最初に目を引いたのは簡体字の看板だった。「〇〇广场」「××特产品」「丰田汽车」「いったいあの何か足りない漢字は何??」その時はまさか自分がこんなにも中国語のとりこになろうとは想像もできなかった。

初日は主人もいたし、空港までは会社の車が迎えに来てくれていた。でも次の日から主人は出勤し、私は一人で子供を連れて幼稚園へ手続きに行かなければならない。しかも、タクシーに乗って！！

マンションには、日本語を話せるスタッフが大勢いて通訳などもしてくれた。タクシーを呼んでもらい、行き先を説明しても

らい、古くて汚い小さなタクシーに乗り込んだ。道中も「どこか変な所に連れて行かれないか?」「遠回りしてお金を余計に取られるんじゃないか?」と、不安で不安で仕方なかったけれど、娘たちの手前、私が不安がるわけにもいかず頑張って平気な顔をしていた。

幼稚園はさびれた町中にあり、着いたときはさらに不安になったけれど、日本人の園長先生の顔を見て、やっと私も子供もほっとすることができた。手続きを終えて、今度は先生にタクシーを呼んでもらい、行き先を説明してもらい、自分のマンションまで何とか戻って来た。マンションの名前・場所すら説明できないのだ。中国では英語もほとんど通じないので、まさに「言葉の壁」を感じるスタートだった。

私たちの住んでいたマンションはビラ形式で広い敷地の中に転々と建物が建っている。タクシーはマンションの入り口までは来たものの、私はそこから敷地内を自分の家までどうやって行くか説明できない。まさに「右」も「左」もわからないのだから。。。。仕方がないので後部座席から身を乗り出して、運転手さんに指差しで方向を示し家の前までたどりついた。「言葉が通じなくても何とかなる！」を実感したスタートでもあった。。。

娘たちの幼稚園が始まり、私は昼間中国語の勉強に通い始めた。マンションのすぐ横にあった「中日青年交流中心」には、外国人向けに中国語はもちろん、二胡や太極拳、中国料理や中国茶などさまざまな講座があった。とりあえず、言葉ができないことには。。。とっていたので中国語初歩の

クラスに入り、週3回午前中3時間勉強することになった。クラスメートはみんな来たばかりの駐在員の奥様。先生は60を超えたおばあさまで、中国人に日本語を教えた経験があるほど日本語が達人な方だった。

最初のうち宿題は本文を全て暗記することで、次の授業でみんなが順番に発表した。中国語の発音は難しい。英語同様日本語にない音も沢山あり、先生に直されてもどこが違ってどれが正しいのかわからないくらいだった。

クラスメートの一人「淳子」さんは、中国語ではchunzi（カタカナで書くとチュンズ）と発音するのだが、qunzi（裙子：これはスカートの意味。こちらカタカナではチュンズ）との区別がなかなかできずとても苦労していた。

1回3時間週3回の授業は苦しい時もあったけれど、大学卒業以来の勉強は楽しくもあり、終わったあとのクラスメートとのランチも楽しみで2年間通い続けた。私は先生がとても好きだったので、初級から中級、上級クラスになるまでずっとこの先生にお世話になった。先生は中国語だけでなく、中国の文化や習慣についてもいろいろ教えてくれた。時には手作りの水餃子を持ってきてくれ、学校のレンジで温めてみんなでごちそうになったこともあった。

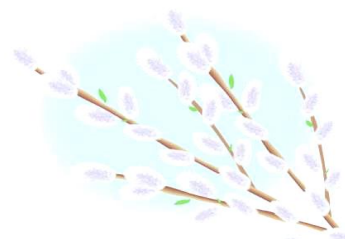
最初は説明のほとんどが日本語だった授業も、次第に中国語が増え、上級クラスになるころには授業の大半が中国語になった。右も左もわからなかった私の中国語は、2年の間に市場で値段交渉ができる位まで成長した。日本と同じでスーパーなどは言葉ができなくても買い物ができるけれど、市

場でお店のおばさんやおじさんと無駄話をしたり、値段の交渉をしたりするのはとても楽しかった。中国はどこにいても大抵店員さんが沢山いて（何しろ人が多い国なので）暇そうにしているので、私のつたない中国語にもいやな顔せず付き合ってくれた。時には、日本語を教えてと売り場の奥から自分で勉強しているらしいノートを出してきたお姉さんもいた。

2年目の終りに自分の中国語力を試してみようと思い、何十年ぶりに試験勉強をして、中国語検定HSK（漢語水平考試）を受けた。試験はとても緊張したけれど結果は7級。思ったよりずっとよい成績で嬉しかった。当時のHSK初中級は1級（いちばん低い）から8級まで。みんな同じ問題を解き点数によって級が決められる。翌年もう一度受験し、8級を取った。頑張ってきた結果が形になった気がして、この時の証書は今も大事にとってある。

3年の任期が終わり日本に戻ってからも、「せっかく覚えた中国語を忘れないように」と、週1回中国語の勉強に通っている。家の事や子供の行事で休むことも多く、新たな進歩も望めないけれど、細く長く...何とか辞めずに6年が経った。

私がユッカの活動を知ったのは、この中国語のクラスメートの方から餃子の会に誘っていただいたのがきっかけ。お陰でたくさん新しい出会いがあった。



中国の恩師とは今でも年賀状のやりとりをしていて、私が中国語の勉強を続けていること、日本に住む外国の方のお手伝いをしていることをとても喜んでくださっている。

帰国以来まだ一度も中国へ行っていないけれど、いつか先生を訪ねて私に中国語の魅力を教えてくれたお礼を言わなければ、と思っている。

「上野美術館見学記」

竹内 梅

先日、日本語を教わっている細谷先生の作品を見るために、上野に行きました。上野動物園には行ったことがあります、美術館は初めてでした。先生の説明によると、上野には他に彫刻館など様々な美術館があるそうです。その辺りから音楽が流れているのが聞こえてきました。外国の洋服を着た人が民族楽器を抱えながら、吹奏していました。心に響く感動的な曲でした。うまく表現できませんが、中国語でいえば「悦耳动听」です。でも、ゆっくり聞く暇がないのが残念でした。上野ならではの雰囲気に取り込まれました。

美術館の入り口には巨大な球体がありました。この球体はピカピカに光っているので、周りの建物や行き来する人が映っていました。でも、球体に写る人や建物は鏡に映るものとは違って、けっこう面白い影になりました。

先生のおかげで、入館料を払いませんで

した。町田美術館に比べると、とても広かったです。先生の作品の画題は「出会い」でした。人間は生きている限り、様々な出会いがあります。有名人との出会いは嬉しいけれど、なかなか実現できるものではありません。しかし、出会いがきっかけで友達になれるかもしれません。日本は狭いので、中国より出会いが多く、良い仲間もでき、私の性格も明るくなりました。

これが入賞の作品ですが、最初見た時私は真っ黒な壁と感じました。なぜこのような形も色もない絵が選ばれたのかと不思議でした。でも、先生のお友達は「この絵は鉛筆で数え切れないくらいの人間の指が重なって書かれていますよ。」と説明してくれました。

近くで見ると、本当にさまざまな指が見えました。すごく感動しました。想像できないくらい苦勞をかけて、この黒い森を描き出しました。

私と先生達はこの絵の前からなかなか離れませんでした。数多い顔はよく見ると、中からトカゲや蝙蝠などが浮かび上がってきました。よく考えると、人間の本心はこの顔みたいに様々です。人は大体自分の本心を隠しています。私は本心と顔が一致すれば、どんな顔になるかと考え込みました。

タイの友達はある絵を見て「これらはたこだ。」と叫びました。彼女の想像力はすごいと思いました。

この壁からマネキンが足を伸ばし、床には布製の長い蛇が這い出しています。カラフルな花が飾ってあっても、不気味な感じがします。しかし、彼女は無関心なのか何事もないように、そのそばに座って、化粧しました。

写真をいっぱい撮りましたが、やはり意味が分からない絵が多かったです。でも、私は絵が好きなので、絵の前に立つと私の想像の翼は見る見るうちに広がり納得しました。鑑賞の時間が本当に短すぎると思いました。来年も素晴らしい絵を見るために、上野美術館に行く積りです。絵は想像の世界に連れて行ってくれたり、時には心を癒してくれたりするものだと思うからです。



覆面パトカー？同乗顛末記

横浜ボランティア

現金が必要になった為、近いが行きつけではない某銀行のATMに行った時のことである。何時もは一度でパスする暗証番号が三度試みても失敗らしくカードは戻ってきてしまった。家に戻り確認したので翌日再度試みたが、このカードでは出金できませんと記されたメモと共にカードは又もや戻されてしまった。銀行に電話で事情を話すと、カードは再発行できるから印鑑、身分証明等を持ち支店まで来るようにとの事だったので仕方なく出向いた。

行員に訳を話すと、手数料を払えばカー

ドは即再発行すると言われ吃驚した。因みに他銀行では手数料は無料だし、暗証番号も六回まで試せると聞いたことがある。自分の落ち度とは言え、預金利子は「0。」の後に更に「0」がつく今時、有料とは何事だと思ひ、即全額下ろすことにした。それでは警察官に来てもらいますので少々お時間を頂きますとの行員の台詞に仰天した。自分は怪しい者に脅かされて来たのでもなく、何処かに送金する積りもないのに何故警官を？と訝ると、100万円以上の出金は警官が立ち会う事になっていますとの返事。そんな話聞いたこともないが、当日に決着したかったので了解した。見回すと店内には行員以外人影は無く、不気味なことこの上ない。

十数分経った頃、普通の恰好をした若い男性が現れ、警察手帳を見せながら××署の〇〇ですと言われるが、偽手帳を見たことが無く、本物も手にとって繁々見たことも無いので真偽の判別はつかないが、まさか行員とグルではなかろうと頷いた。しかし脳裏に「？」マークが無数に浮ぶ。改めて大金の出金の訳を聞かれ、カード再発行が有料だからと答えると、それは自分も知らなかったと行員に問い質していた。数分も経たない内に行員が現れ、手数料のわからない方法もありますが・・・と言われたが、今更何と腑に落ちず断った。

私の上司と交代しますと言う声で顔を上げると、イケメンのこれまた若き男性が2人立っていた。こんな若い人が上司？と訝ったが、後で友人に聞くと若くて上司と呼ばれる人はエリートとのこと。それにしても何故一人増えた？と又しても疑問符がちらつく。

現金の用意が出来、確認後バッグに納め帰ろうとすると、その現金は持ち帰るのか、家は近いのか、帰宅の方法はなどを聞かれ、近いので歩いて帰り、現金は明日まで家に置く旨伝え、危ないし、車で来ているから家まで送ります。現金は家に置くと万一のことも有り得る、玄関口で待っているから家の近くの銀行の通帳とカードを取ってきて、預けましようかと促された。益々怪しいと思ったが、瞬時に断る理由も見付からず、挟まれた形で車庫に向かった。パトカーと思いきや、どうぞと誘導された車は、よく見掛ける白のバンではないか。さてこの二人、これから敵に回るのか味方になってくれるのか、一人は運転手役か、乗った途端実は俺達は・・・になりはしないかと「疑い深くあれ」の戒めが頭を掠めたが、度胸を決め乗り込んだ。途中この車を見た二人の制服警官が敬礼をしたので、やっと一抹の不安は消え去った。普通車に見えるが、彼等には一見して、それと分かる特徴があるとのこと。これが俗に言う覆面パトカーらしい。車中オレオレ詐欺師から電話はなかったか聞かれ、一度あったが相手が先に切ってしまったので、今度掛かってきたら、今迄の被害者の敵討ちの為にも、警官と示し合わせ、即逮捕となるよう心掛けていると答えたら、危険なことだから止ましようかと諭されてしまった。

我が家に戻り、近隣の銀行へ向うべく必要品を整え再度車中へ。銀行は既に閉店していた。偶々行員がATMの所にいたにも係わらず、更に支店長を呼び出し、経緯を告げていた。常に出金ばかりで入金の方法が分からず行員に依頼し、警官立会いのもと目度く全額入金完了。しかし気が付い

たが遅かりし・・・必要だった現金まで機械に吸い込まれてしまった。家まで送ると言われるのを固辞し長時間のお付き合いを感謝すると、逆にご協力有り難うございましたと礼を言われて不思議に思ったが、犯罪発生を未然に防いだ事で点数になるとのこと、これまた物知りの台詞だ。いずれにしても、三人の私服警官の方々疑って御免なさい、送迎、見守り有り難うございました、と心の中でお詫び、お礼を言いながら、車がUターンし署へ戻るのを見送った。

残留婦人として生きて

西岡 瑞江

この記事は西岡瑞江さんが中国残留夫人として半生を過ごされてきた貴重な記録の紹介です。



西岡さんは昭和2年の生まれで今年（平成24年）86歳になられます。西岡さんが書かれたものは400時詰め原稿用紙265枚にも及ぶ大作で、一庶民の目から見た戦後の中国の激動をしっかりと記憶され、詳細に記録されている貴重な資料ですが、「たより」では紙面の制約から全部をご紹介できなくて残念ながらダイジェストとしてご紹介させていただきます。

ここでは、「一人の日本人の女性が遭遇した過酷な運命をいかに乗り越えてきて生きてきたか」に対象を絞って第一部をご紹介したいと思います。なお、第一部、第二部、第三部の区分けは西岡さんの原文ではなされていませんが、編集にあたって私の判断で三部に分けさせていただきました。

第一部 渡満から敗戦後まで

第二部 中国人の妻として

第三部 帰国

(以上たより24号より)

たより24号(平成25年1月20日発行)に第一部を掲載して第二部以降は次号にと思っておりましたが、1年間間が空いてしまって26号になってしまいました。

西岡さん、皆様におわび申し上げます。

(中村明子)

*過去のたよりは、ユッカの会ホームページからご覧いただけます。

<http://yukkanokai2014.web.fc2.com>

第二章 中国人の妻として

[解放]

1949年9月頃十カ月の捕虜生活が終わり解放されました。子供が四カ月ぐらいになった或る日、出所する用意をするように云われ、朝食後玄関の所に行くと主人が待っていました。子供と三人で解放団を出て、十カ月の捕虜生活が終わり自由になれたのです。これからどうなるか明日の事はわかりませんが、福建省の泉州の家まで帰らなくてはなりません。主人が「行く先々に招待所があり、招待所から招待所までの乗物や食事の世話をしてくれる。」というのでそうしましたが、招待所に行ってもすぐ旅費や食費をもらえるわけではなく一日、二日待たされるのが常でした。山海関を中心として関内、関外と呼び、使うお金も違っていました。それからいくつかの招待所を過ぎ済南につきましました。その頃から主食はメリケン粉の雑炊が多く、私はお腹をこわして困

りました。よく雨も降り子供のオムツが乾かなくて、私の衣類をオムツ使っても足りない時もありました。徐州について時、日本に居た時に唄った「麦と兵隊」を口ずさみ一人で感無量でした。乗物は無蓋車か荷物を運ぶトラックに乗ったりして、南へ南へと移動しました。旅が南へ南へと行く旅だったので助かりました。二人の荷物で売れそうな物は殆ど食べ物に代わり、延吉を出て一ヶ月半位でやっと泉州に着きました。いま思えばよく生きて長い旅をしたものだと思います。途中旅の道連れになった人などなく親子三人だけの旅でした。

[泉州に着いた]

長い長い旅が終わって、やっと泉州に着きました。そこは今でもある古い店が並ぶ通りで、泉州市の中心より少しずれている場所で、後日私が一夜お世話になった店にお礼を言いたくてさがしましたが、同じ様な家が並んでいるので分かりませんでした。とにかく疲れていたの主人が見つけてくれた家に久しぶりに足をのばして第一夜が明けました。その家は宿ではなかったようで、お金もなかったので頼んで一夜泊めて貰ったのだと思います。私が三つ編みにした髪を白い毛糸で束ねているのを見て、そこのお婆さんがしきりに何か言うのですが、今日からはこの土地の閩南語なのでさっぱり分かりません。お婆さんは娘さんに赤い毛糸を持ってこさせて結び直してくれました。主人がこの土地の風習で、白い糸を髪につけるのは親とか主人とかが亡くなった時だけだと教えてくれました。親切なお婆さんのおかげで私は大恥をか

かずに済みました。それだけではない、私を迎えた姑が私の髪の毛の白い毛糸を見たら縁起でもない怒るだろう。そして悪いことがあるたびに、私がつけていた白い毛糸のせいにしたでしょう。朝食をすませると、主人は何年振りかで帰る家がどうなっているか一先ず一人で様子を見に行きました。過ぎにもどって来て村に帰れるからと迎えに来てくれました。荷物らしいものはほとんどなく、四カ月の娘と言葉の分からない私を連れて、乞食のような格好での帰郷でした。

[主人の故郷]

主人の故郷は泉州市西門外西埔山仔后さいもんがいしーぼうざんすほうといい、村全体が「曾」の名字です。村の人達が沢山私を見に来ていました。姑はわざわざ姿をかくし、私との折り合いがよいようにという「避開」びーかいという村の風習によってずっと後から姿を見せました。まず、虱だらけの衣類を煮沸消毒して頭の虱にはDDTをかけて退治して体中さっぱりしました。

村での生活は、北京語が全く通じません。食べるものも主食はさつまいもで、お米はさつまいものおかゆの中にほんの少し入っているだけです。夜は電気もなく、トイレは板を渡しただけ、低いレンガの囲いがあるだけで入り口は開いたままです。村には井戸が一つあり、いい泉で当時120人ほどの村人が使うのに十分でした。家には大きな水がめがあり天秤棒で水を汲んでくるのです。私は天秤棒で運ぶのが苦手でしたが、ここでは畑に運ぶ肥やしも、野菜も何でも肩で担ぐので、きらいなどとは言っていられません。

私は来た当時は一週間も居たくない、早くここから出たいと思いました。だけど三十年間も居ることになり、村の外にもめったに出られませんでした。

1950年11月に次女が生まれました。村には産婆さんはいなくて村の老婆が産婆さんの役をします。お産の前に産後に食べる生姜の干したの、ごま油、鶏、そーめん等を用意します。長女が生まれた解放団ではお産前後三か月間「中灶」つんざおというお米のご飯にホウレンソウに卵のはいったスープつきの食事を食べていましたが、ここではお産の後卵を二個焼いて食べられたら良い方です。子供は生まれて二十日ぐらいすると米の粉をミルクのように煮てミルク瓶でのませました。牛乳も羊乳も売ってはいませんが農村ではそんな余裕のある家は少ないのです。二、三か月になると米の粉をのりのように煮てさじで食べさせました。1950年頃生活は苦しくてもまあまあ平和でした。春になると「五保戸」ごぼうほうの制度が出来ました。「五保戸」とは衣・食・住・用・病のことで、子供や頼りになる人の居ない老人を保護する制度で、対象になる家には小学校高学年の子供達が常に訪ねて行っている手伝いをします。子供達にもとても良い習慣が付き、道を歩いていても老人に手を貸し、荷物を持ってあげたりするのを見るとほほえましい限りでした。



[土地改革]

1950年朝鮮戦争が始まり、この村の若者も参軍する人が出るようになりました。新政権は樹立されたばかりで何の実績もあげていなかったが、長い間国民党の悪政に痛めつけられていた大衆は新政権を擁護しました。広大な新解放地域には国民党時代の旧公務員と新しい教育を受けて新たに配置されたものが実務を執り、共産党古参幹部は要所にだけ配置され監視的役割を果たしているに過ぎませんでした。新政権は「土地改革」と「鎮圧反革命・反革命分子の粛清」の二大政治運動を展開して農民を新政権側にひきつけ、国民党残存勢力の社会的基盤の排除を図りました。私の住んでいた村は四つの小さな村が一つの拠点として土地改革に参加することとなりました。この拠点は二百余戸の住民がおり、地主は二戸、富農は五戸、中農は三十戸、その他が貧農と日雇いでした。地主は三角帽子をかぶせられ、おおきな札を下げさせられて、銅鑼や太鼓ではやしたてられて村中を引き回され鬭争会にかけられ、公民権を剥奪され、個別的に隔離監視されます。耕地、財産はすべて没収するが、地主の営む工商業には干渉しない。地主は自分で耕作できる限度内で一定の土地を与えられ、貧農委員会の監視の下で強制的に労働に従事させる、などの処置がとられました。「おーぼーでいずう悪覇地主」と称された少数の地主に対しては県政府が数万人の鬭争会を開き、その場で銃殺刑に処しました。その時は皆で見に行かなければならず、老人も若者も道一杯の人で、靴の後ろを踏まれてもかがんで直すことも出来ないのです。

「時代は変わった」農民の誰もが心の底からそう感じ、初めて自分の生活に自信を持ちました。

[日本からの手紙]

1955年1月25日 四女^{すーずあん}似荃誕生。

1956年9月29日 克己^{かつみ}誕生

泉州に帰ってから五年目頃、阜新で家族と別れてから七年ぐらいたち父母が帰ったと思われる九州の本籍地に手紙を書いてみました。手紙は着くか着かぬか分かりませんでした。とにかく出してみようと思ったのです。それから二ヶ月近くたち一枚の家族の写真（この写真は文化大革命の時持っていかれた）と手紙が届きました。別れて七年近くにもなると弟や妹達も大きくなり別人のようでした。それから時々父の便りがありました。妹は姉さんは本が好きだったし、日本語を忘れると困るからと「主婦の友」を毎月送ってくれるようになりました。きれいな写真入りの本は私を喜ばせ、村の人達が見たこともない立派な本は私の自慢でもありました。主婦の友を見ると世界の情勢や現在日本の流行などいろいろな事が分かります。そのうち本が届かなくなり、半年ほどしてまた届いたりするので、妹に無理して送らなくてもいいと手紙を書きましたら、届いてないことを知らなかったと、それから書留にして送ってくれるようになりました。ただ、少しでも見せたくない記事が載っているとその本は没収されて、本の代わりに没収したという紙切れ一枚入った袋が届き私をがっかりさせました。

父がマレーシアの親戚をとおして子供

服や甘味料を贈ってくれたのですが、一度だけしか届かないので、お金を送ってみようと一万円送ってきました。主人が雀を捕るため大きな網を作り、結局失敗して借金が残ったのですが、そのお金で返すことが出来、子供達にも一足ずつ靴を買ってやり、長いこと食べていなかった豚の頭皮とにんにくの芽を炒めて皆で十分食べました。何より40元の借金を返せたのが一番の喜びでした。この村には華僑が何軒かあり、どこかの家に送金があると朝「喜鳥」^{けじょう}が良い声でさえずるので「〇〇さんの家の〇〇さんから送金があったそう」とよく聞いていました。それまでは他人事だったけど、父から送金があるようになり「喜鳥」が啼くのを心待ちにしたものです。それから父は一万円ずつ、ずっと送ってくれたので生活も以前ほど貧乏ではなくなりました。お礼の手紙を書くときまたお金を送ってくれるので、長年一人ぼっちだったのに日本の本も読めるし、二、三カ月に一度一万円送って貰えるし、とても嬉しく、もし日本に帰れるなら寿命が十年短くなくてもよいから帰りたいと思ったものでした。

[人民公社]

1958年大躍進が始まりました。全国の農民・政府機関・公共団体・学校・病院など例外なく「全民煉鋼」^{ぜんみんれんこう}運動に参加させられました。家庭の鉄製品は古釘一本まで集められ、二十四時間休みなしにかまどを焚き続けて鉄を作りました。各職場ごとにノルマが課せられ、それを達成するために人々は普段の仕事を放りだして鉄屑探しに奔走しました。家庭の鍋釜も供出したので家庭の炊事は禁止され皆

食堂でとる規則になりました。農民にとっては炊事の時間や手間は省けましたが、気持ちは空虚で物足りない感じがありました。農村は大豊作にもかかわらず青壮年は男女を問わず「水利建設」と「全民煉鋼」に動員され、農業生産に従事できるのは老人と子供ぐらいで労働力不足のため農作物はほとんど田畑に放置され凶作となってしまいました。

その時私は家の代表として水利建設に出ていました。主人は村から離れたがらないので小さな子供が五人も居るのに上の姉達に頼んで私が出かけたのでした。水利建設は私の一番苦手な土運びでした。だが仕事が五時に終わり食事と洗濯をすると用はありません。あとの時間は本を読む時間です。借りてきた本を小さなランプの光で夢中になって読みました。家では昼は田畑に出るし、夜は子供の世話の合間に姑に見つからないように読むだけです。誰にも遠慮をせず本を読める外の仕事は、昼間はつらいけど私には魅力でもありました。私が土運びが苦手なのを知っている外村の人達はカゴに少なめに入れてくれます。人の情けは有難いものです。

「全民煉鋼」と「水利建設」は一段落し[人民公社]運動が「大躍進」の中心課題になりました。「試験田」を設けて高産の経験を集中的に施し、畝産を飛躍的に高めてみようとしたがこれも失敗しました。1959年公共食堂は閉鎖されました。各生産隊の貯備糧が底をついたからです。「試験田」で高生産を宣伝し成績を上げるため食料の供出を飛躍的に高めた結果、農民の口糧まで供出してしまったのです。

1959年の秋ごろから始まった食料不足はますます激しくなり、主食の食糧や主要な副食品だけでなく他の食べ物や野菜まで平時の十倍以上にはね上がり、私等農民は収入がないので栄養を取るなど縁遠い物でした。村では今まで禁止になっていた「自由地」を開き野菜を植えるのがはやりました。墓地の無い人が葬ることの出来る「李層山」という場所も墓と墓との空いたところにサツマイモを植えました。そうでもしないと土地がなくこの場所も早い者勝ちでした。

[福建日報を見て帰国したいと思う]

1953年4月三女出産。五月になると二番目の弟の所に行っていた姑が男の子を抱いてきました。私が女の子を生んだからこの男の子を自分の子として育てたいというのです。私は五歳を頭に女の子が三人もいるのに赤ん坊一人分の雑用が増えてうんざりです。姑は帰るたびに弟が技術員をしていた福建日報という新聞を持ってきました。その新聞に中国に残留している日本人で帰国を希望する人は日本赤十字社が上海まで迎えに行く。上海までは中国赤十字社が送る。帰国できるようになったので手続きをするように、日本に着いたら日本の政府が生活用品や住む所も用意してくれるという夢のような記事を見つけました。私は心を鬼にして帰ろうと決心しました。その頃生活は苦しく、日本の親ももし帰れたら子供を育てるのは助けてやるから連れて帰ってもいいと言っていました。私は主人に頼んで新聞に出ている所に手紙を書いてももらいました。何日かして外務処から男女二人の同志が尋ねてきて、私の意見を聞

き、帰国したいのなら主人や家族は反対できない、帰国が決まった私や子供に決して手を挙げてはいけないと何度も強く言いました。きっと主人が私や子供に手をあげていたのを知っていたのでしょう。また上海まで子供三人の付き添いに女の同志が送ってくれる、着る服や途中で使う寝具も用意するなどいろいろ話してくれました。日本の父に知らせると、三人の子供は連れて帰っても良い、一緒に育ててやるとの返事がすぐ来ました。これまで主人の仕打ちをじっと我慢してきた私ですが、やれやれこれでやっと主人と離れることが出来ると内心とても嬉しく思いました。ところが急にやさしくされ、泣いて帰らないでほしいと頼まれると、自分の都合で父親の無い子にすると思えば不憫で自分さえ我慢すればと帰国を断念しました。そして親子五人で撮った写真を日本に送りました。

[生産隊農民の暮らし]

農村では一日働くと「工分」(労働点数)がもらえ、一年間働いてためた「工分」が一年の終わりの食糧分配の要素になります。基本口糧は男性全員が等しく、女性は男性より四分の一少なく、三歳以上の子供は大人と同じ、三歳以下は大人の半分なので子供の数が多いほど得をすることになります。その頃我が家は労働力が少なく子供が多いのでよく悪口を言われました。老母たちの中には子や孫が無いか、少なく、配給される量が少ない人は、労働力が弱く子供の多い我が家に対し「自分たちが子育てを助けているようなものだ」と聞こえよがしに云うものもありました。雨の日が続くと皆は休んでも

私が我が家の代表として街に下肥を運びに行くのです。三人でリヤカーに乗せた肥桶をひっぱるのですが道は舗装してなく、石ころばかりか道の中ごろはくぼみが多く、雨の後はそれはひどく歩きづらい道でした。朝の四時頃から跣で片道一時間半はかかる郊外を一日三往復するのです。力の弱い私と組んで下さった人に今でも感謝しています。私と組んで下さる二人に縫物などで感謝の気持ちをくみとってほしいと思いました。特に華僑の老王夫婦には米を買う金を貸して貰ったり、私の力不足を不平も言わずに力を貸して下さいました。今でも中国に帰るたび手土産を持って訪ね昔話をするのを楽しみにしています。困っていた時に親切にいただいた御恩は一生忘れられません。

その頃主人は学習班に入れられ反革命分子として「階級敵人」として扱われ一番つらい作業を割り当てられ「工分」は二分ばかり減らされました。「工分」はどのくらい一生懸命働くかではなく何日働いたかで決まるので、五時間で出来る作業に一日働いたことになる十時間かけるということもよくありました。「工分」はいつも農民たちのいさかいの種で農作業の効率をいちじるしく落としました。農作業は二千年前とほとんど同じようなや



り方で、水も、下肥も、燃料も、野菜もすべて竹籠や樽に入れて天秤棒で担いで運び、私の一番

の苦手な作業でした。今思えば考えられないほど皆が貧乏でした。主食はさつまいもをすって澱粉を取ったかすを煮たものを半分は人間が食べて、半分は豚のえさにしたものや、さつまいもをついて米を少し入れお粥にしたものです。旧正月の頃にはほとんど食べる米がなく、大麦を石うすでひいて粉にして、糊のように煮てさつまいもを入れた麦糊でした。私はよくお腹をこわし工作中に走って用を足しに行くのをみて、一緒に仕事をしていた一人暮らしのおばあさんが自分の配給の米を一握り持ってきて、生姜入りのご飯を食べたら良くなるからとくれました。そのお米はお薬よりよくきいて下痢は良くなりました。人民公社が中止状態になると知識人の下放が本格的になりました。農民たちはこの政策をあまり歓迎していなかったのです。知識人は農業生産の労力としては役に立たず、農村には労働力が有り余っているのに住居や口糧も提供しなければならぬからです。でも毛主席の提唱する「革命路線」であれば「歓迎」し積極的に「協力」しなければならず、皆はまた歯をくいしばって、銅鑼や太鼓で下放者を迎え入れたのです。

[文化大革命]

1965年文化大革命がはじまりました。農村でも夜になると集会場所に集まり毎日 [人民日報] の一面記事を学習しました。やがてそれに代えて「毛主席語録」を暗唱することになりました。泉州市西門外の西埔山仔村も例外ではなくある日村中大字報で埋められました。主人が国民党に所属していたというだけで根拠もないことを書きたてました。主人は学習

班に入れられそこで寝泊まりしていましたが、何カ月かして帰ってきました。

ある日青年団の人達が連行して行き、翌日部屋の寝台の下から床の煉瓦の下まで掘って部屋の中は砂やレンガで足の踏み場ありません。私が日本人だから台湾と連絡してスパイ活動をしているらしいというのでした。日本から送ってきた大切な主婦の友や写真等は皆無くなっていました。主人は隣村に出来た学習班に入れられ、以前国民党の部隊にいた罪と、妻が日本人でスパイ活動をしているというバカみたいな罪で三角帽をかぶせられ、名前と罪状を大書した厚板を首からぶら下げさせ、麻ひもで両腕をしばりあげて銅鑼や太鼓で囃子ながら村中を引き回され、広場で闘争会を開き国民党に属していた罪を認めさせられたのです。

主人の留守を守る私は、子供と毎日畠にでて工分を稼がなければならず、現金収入は私が寝ずにミシンで縫物をした金だけです。近所の人はいろいろと縫物を持ってきて、少しも以前と変わらず接してくれました。四人の女の子は何かと手助けをしてくれて助かりました。長女は小学校をどうやら卒業しましたが、次女は二年行っただけでやめました。私はせめて六年間は行ってほしかったのですが、学校に行っても何かといじめられ居心地が悪く、家に労働力も足りなかったので行かなくなりました。三女は養女に出したのですが、可愛がってくれていたお婆あちゃんが亡くなり、息子夫婦に子守をさせられ小学校にも行っていません。一生すまない事をしたと思っています。四女、長男も小学校までです。私や子供た

ちは主人によく殴られました。文化大革命でさんざんいじめられたのは気の毒だとは思いますが、反抗できない妻や子供を殴るのはどうかと思います。男兄弟四人の長男ですが、後の三人は誰も主人のような人は居ないので、やっぱり軍隊に入れられずい分ひどい思いで大人になったのかとも思います。

あの頃よく野外映画の放映がありました。だいたい抗日戦争時代のものが多く、日本の兵隊が村を侵略し家を焼いたり、逃げまどう農民を殺したり、家畜をひっぱって行ったり、とても見られないすごいシーンもありました。明るる日毎日洗濯する川に行くと何人かが洗濯していて日本鬼子兵の恐ろしい話でもりあがっていました。私はだまって聞いていましたがあんまり話が終わらないのでとうとう声を出しました。「本当にあの兵隊達は悪い事をしてた、だが日本人が全部わるいわけではないのよ。現に私も日本人、日本の女だけどまちがった事はしてないつもり。中国人だからと云って皆いい人とは云えないでしょう。」と云いました。私は日本女性としていつも頭のどこかに「日本の女」を意識していました。あの頃皆お腹をすかせて仕事の途中昼頃になると龍眼を取ってきたり、サトウキビ畠が近くにあれば何本か折って来たりしたものです。皆して取りに行きますが私は一度も行きませんでした。でも行かない私にわけてくれると食べました。

こういうこともありました。右足の「むこうずね」に小さな傷が出来昼ご飯を食べていた時テーブルの下にいた鶏に傷口をつつかれました。鶏の口ばしは毒だと

聞いてますが、それから二十日間位ベッドから下りられなくなり、医者にみてもらう金がないので日本から送って来た主婦の友をお金にかえてお薬を買いました。少しよくなった頃又つつかれ二度もつつかれたので半年以上かかってやっと良くなった苦い思い出です。またある初夏の端午の節句のころ嫁いだ娘達が帰ってくるのでご馳走の準備をしてお湯を両手両足にかぶり大ヤケドを負いました。隣村の診療所に走りましたが「帰って藁灰に水を入れてねりヤケドの上に置き、熱で灰が乾いたらまた水分のある灰を置いて三時間冷やさない」教えてもらい薬はくれませんでした。おかげであんな大ヤケドをしたのにその夜はいつもと変わりなくよく眠れました。何日かすると水泡も自然に引いて傷もなく一文も使わないでヤケドは跡形もなく良くなりました。

第三章 帰国

[日中国交正常化]

文革が始まってまもなく父から日本国の入国許可証が届きました。嬉しかったが他人に見られたらめんどろなので結婚していた長女に預かってもらいました。当時中国在住の外国人が所在地を出る時には所在地の公安局に旅行証明の下付を申請し、許可されるとその証明書を持って旅行先の県や市の公安局に来たことを届け出て承認を押しってもらう様に規定されていました。私は其の頃なかなか帰国の許可がおりないので福建省の公安局に行くため福州に行きました。私は中国に

来て三十年近くになるが何も違法になるような事はしてない。日本国籍なのになぜ出国させてもらえないのか、年老いた両親が私の帰りを待っていると福州の公安局に云いましたが何の反応もありませんでした。

1972年9月日中国交正常化が実現しました。日中国交が回復した後主人の周りの人々が西岡を日本に帰してあげたら、このままだと子供は一生百姓で終わるしかない、日本は今工業が発展してとても住みよい国になっている、と云うようになったのです。ついこの間まで日本人を佐藤政府と云って嫌っていたのに、今は皆して日本をととてもほめて、一日も早く私が日本に帰れるようにという皆の好意が私にも伝わってきました。その頃町の外事課に私の出国手続きがどの程度進んでいるかを見に行きました。途中で知らない男性に「貴女は西岡さんですか」と聞かれたので「はい」と答えると「貴女は文化大革命でスパイの嫌疑をかけられていたので、書類が下積みになっている。これではいつまでまってもダメです。北京の日本大使館に手紙を書いて頼んでみるといい」と教えてくれました。それから週に二通ぐらい沢山手紙を書き、とうとう許可が下りました。その時は長男と一緒に帰るつもりで長男に「アイウエオ」を教えていました。

ところが長男（本当は二男）は十八歳なので大人とみなされ、十六歳の弟は子供として子供の方に出国許可が下りたのです。



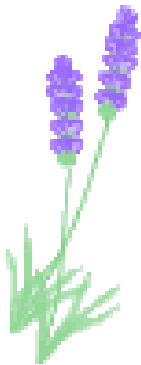
そして父に借金を返したら帰国のお金が足りなくなったから少し送ってほしいと頼むと十一万円送ってきました。出発する前の晩は家に入りきれないほど沢山の人が来てくれ、別れを惜しんでお祝い品を持ってきました。皆が言うには日本の政治が変わろうとしているから、もしかしたら政局の都合で帰れなくなるかもしれないので上海に着いたら出国手続きを早くし、手続きが終わり次第飛行機に乗ることが大切だと、私のことを心配してくれていました。文革の時ひどいことを言われていても裏でささえてくれた人たちともお別れです。主人とは二、三か月話をしていませんでしたので、長女と次女の主人に上海まで行ってもらうつもりでしたが、一週間後に別れるという頃娘を通じて自分が行きたいと云ってきました。私は主人が行くのが筋なのだからとお願いしました。上海では「東風飯店」という中国から日本へ、日本から中国への客が泊まるホテルに泊まりました。戦前の日本にはこんなご馳走もあったんだろうと思われる別世界のような食事で、主人も十分満足しているようでした。上海に着いて三日目に渡航の手続きを終えました。テレビで12月16日に田中首相が退任し、三木内閣が成立したことを知り、17日の飛行機に乗らないと帰れなくなると、主人にホテル代を勘定してもらいに行くに足りないといひます。お金は息子と二人で日本円で四千元持っているだけです。私は途方にくれましたが、ふと思いついて北京の日本大使館に電話をして頼んでみました。するとすぐOKが出ました。こうして大使館に二度助けられたの

です。一度はなかなか帰国できない私を帰国させて下さったこと。また今回お金を貸して下さいましたこと。そのお金はその後請求はありませんでした。有難いと大使館には心より感謝しています。

[1974年12月17日 帰国]

羽田の飛行場に到着して荷物を取るのに時間がかかり、外を見ていた息子が「かあちゃん、外におばあちゃんに来てよ」と言っています。私は見たこともないのにどうして分かるのかしらと思いながらも「西岡瑞江さん」と呼ばれ自然に「ハイ」と返事をしたのが、私が日本語で声を出した三十年ぶりの始まりでした。県庁、市役所、区役所からそれぞれ一名と、母と弟と妹の主人が迎えに来ていました。母はすぐ分かりましたが小学校五年生の時に分かれた弟は分かりませんでした。帰りに県庁と市役所と区役所に寄り、それぞれお祝いの金一封をいただきました。母は飛行場で逢ってから私の手を握り、ざらざらの私の手をさすりながら「苦勞をしたのね」と言って涙を流しました。妹が「姉さんが日本語を忘れると困るから」と送ってくれていた主婦の友のお蔭で日本の文字は忘れなかったし、時々来る手紙の返事にも不自由はなかったので日本語は覚えているつもりでした。でも、皆さんのしゃべっている言葉がとても早口で聞き取れなくて困りました。こんなつもりではなかったと思いながら聞き返しながら返事の内容を考えながらの一時期でした。返事をする自分の声が空中に浮いているような感じで自分でも不思議でした。県庁では「入歯が随分きれいはいってますね」とほめられうれしく思

いました。この入歯は私が日本に帰るのを知った友だちが「悪い歯を抜いて入歯にしたら、日本は入歯が随分高いらしいよ」と云ってくれたので決心して総入歯にしたのです。家に着くと弟や妹、そのつれあいや子供達で家の中は一杯でした。一人一人紹介してもらいましたが、敗戦で別れた時小学生だった弟や妹たちは、今は皆子持ちの親になっていました。母は私と息子に妹が買ってくれたピンクの軽なお布団を用意してくれていました。筆筒の上に額縁に入った私の看護婦姿の写真があり、三十年間も私が食べ物に困らないようにと朝に晩にご飯やお茶をあげてくれていた親心に感謝しました。私は何もお土産はありませんでしたが酒好きの父のために茅台酒を二本買って来たのを父はとても喜んでくれました。夜寝ていてふと思いました。ああ夢にまで見た日本に帰って来れた。あのころはよく日本に帰れることが出来たら十年寿命が縮んでもよいと思ったものでした。それがこうして日本に帰れて手足を伸ばし、新しい綺麗な軽なお布団に寝ている自分が夢のような思いでした。父と母はアパート住まいで六畳と四畳半の二部屋でした。父は六十六歳で私の弟と二人で不動産の試験を受け不動産屋さんを始めたそうです。やはり帰国する私の生活が心配で無理してその年で資格を取ったんだと思います。二日目にすぐ下の妹の家のお風呂に入れてもらいました。湯船につかるのは三十数年ぶり、息子は生まれて初めての風呂でした。



[日本での生活が始まる]

12月17日に帰国して、1月7日までは父母と一緒に住みましたが、8日からは学校が始まるので、朝が早い私たちは父がやっている不動産屋の事務所に住む事になりました。事務所には何でも一通りの生活用品はありましたし、米やおかずも母が買ってくれました。明るる日区役所の福祉の方と病院に行きました。右手は痛くて箸も持てなくなっていましたし、体中浮腫で水ぶくれのような体でした。その日から毎日病院に通い、整形外科で手の治療。内科の先生は「このむくみを治さないと長生き出来ませんよ」と云われました。もともと腎臓を患ったことのある私が、子供を七人も生み、栄養らしいものは何一つとってないので、しかたがありません。栄養不良からの浮腫だと言われ、利尿剤と薬をもらいました。今でも利尿剤は毎日飲んでます。今こうしてられるのも日本に帰って来られたからだと思っています。栄養は取りすぎるほどとれるし、手や足が痛いと言えば治療に行けばよいのですから。

息子は1月8日から中学校の特殊学級にいられていただく事になりました。息子は小学校に入ったばかりの頃、文化大革命で父親が槍玉にあげられていたので、学校でいじめられ泣き泣き帰ってくる毎日、そのうち学校に行かなくなり家畜の世話をするようになりました。そんな息子が中学1年生の三学期に編入させていただき、外見だけでも立派な中学生になりました。あの頃はまだ日本語学校はなくアイウエオから每晚息子に読み書きを教え、毎日高橋先生と日記の交換をし

した。学校であった事も皆私に通じるし私の要望や学校の要望もお互いにわかるので助かりました。その頃私はまだ働いてなかったので親の世話になっていましたが、学校の先生達のすすめで生活保護を二か月もらいました。日本に帰国して四カ月が過ぎた頃、少しは日本の生活にも慣れてきて早く仕事をしたいと思うようになりました。私は昔看護婦でしたがそれを証明するものは何もなく、また中国の田舎で三十年も百姓をしていたので医療という人の命を預かる仕事にはとてもついてはいけません。区役所の福祉課で丁度特別養護老人ホーム「芙蓉苑」の寮母を募集しているからと世話して下さい、私は「特別養護老人ホーム・芙蓉苑」に寮母として就職しました。最初の給料は七万円でした。三か月ぐらいたって夜勤をするようになると一ヶ月に三、四回夜勤し一回四千円でした。あの頃息子と二人一番安いものを食べ、一番安いものを着て少しでも中国に残してきた娘や主人に送金することにつとめました。息子は白米の御飯が食べられるのだから味噌をなめていてもよいと云い、二人で協力して送金しました。私が出勤する様になるとまっ黒な私の顔を見て、主任の水梨さんは毎朝化粧をしてくれるようになりました。だが毎朝主任さんの化粧品を使うのも悪いと思い、帰りに上大岡のデパートで化粧品を買いました。明るる日主任さんは私が買った化粧品が高いのにあきれていました。私は其の頃品物の値段がわからず、すすめられた品をこんなものかと思って買ったのでした。そして仕事の帰りにその店に行き安いのと換え

てもらって下さいました。こうして利尿剤を飲みながら働きましたが、朝飲むと仕事の途中でトイレばかり行き、夜飲むと寝られなくて困りました。その頃港南区にある厚生事業団の安い住宅に引っ越していました。そして8月6日にととう入院するようになり二か月入院して退院しました。息子は毎朝「ニラの卵とじ」を作り病院に寄ってくれ、同室の二人にも喜ばれました。約二か月入院し先生は他の仕事に変わるように言われましたが、他の仕事を探すのも何も分かりませんしもとの職場に戻りました。息子は中学校を卒業し追浜の職業訓練校に入りました。中学を卒業する時、父兄の方々から息子が特殊学級の同級生の面倒をよく見てあげてお世話になったといろいろな品を沢山いただきびっくりしました。来日して一年以内の人が出る県主催の弁論大会にも出ました。こうして息子は息子なりに一生懸命に生きてきたのです。そして中国で住んでいた家が倒れそうだから修理して欲しい、出来れば新しく建てたいと言ってきました。あの頃は円高だったので少しずつ貯めたお金で建てられそうだったので新しく建てようと思いました。文化大革命でいじめた人達に日本の女の意地を見せてやりたいと思ったのです。村でも新築した家は殆どなく、主人は新築した家に一年住んで昭和58年に胃がん で亡くなりました。



[子供等の来日]

第二回目に私達が帰国して五年後、初め私と一緒に帰国するはずだった二男が来日しました。来日してまもなく塗装業をしている人に頼んでペンキの仕事につきました。第三回目は二男克己の妻千尋と4歳の娘でしたが、この妻は十年ぐらい後に離婚しました。第四回目は長女ナナ似芸（日本名美子）とその長男の洪騰竜（日本名志郎）が昭和59年12月26日に来日しました。上海からの電報では27日になっていたのので、その日に休暇を取って成田に迎えに行く用意をしていたのですが、26日の夕方暗くなってタクシーで私の家に着きびっくりしました。言葉は分からないし、お腹は空くし、日が暮れるし、寒いし、心細かったのを親切なタクシーの人が連れて来て下さったのです。まあ無事についてよかったのですが当時一ヶ月七万円の給料の時、タクシー代三万円は痛かったです。長女も私と同じ厚生事業団の一室を借りて住み、近所のお弁当屋さんに勤め、午後は上大岡の日本語学校に行きました。孫は中学校の三年生に入れて頂きましたが、出来るのは数学ぐらいで日本語はアイウエオから習うので先生も生徒も大変でした。家には参考書は何もなく、近くにある図書館によく行って勉強していたようです。第五回目は私と一緒に来た三男の嫁で昭和60年12月20日に来ました。この嫁は高校を卒業しているので、学校を出ていない息子をバカにして、13年ぐらいしてお金を全部と二人の孫を連れて知らぬ間に出て行きました。息子は一人になり無一文になりました。あの頃を思うと私の一生で一

番くやしくつらい毎日でした。裏切られる事は生活が苦しいよりつらいものです。第六回目の来日は昭和61年4月11日に長女の主人と二男とその妹でした。二男は兄さんより背が高く、兄の出た中学校に入れて頂きましたが、同級生に年を聞かれるのが嫌で学校に行かなくなりました。私はこれから日本で生活していくのなら何か手に職をと思い、厚生事業団の人に頼んで宮大工の弟子にしてもらいましたが、まだ言葉が不自由で住み込みは無理でした。自分で部品を作る流れ作業の会社に行ったりしていました。そのうち友達も少しは出来、給料の良い会社に次々と変わっていたようでした。私は「日本ではそんなに職を変わるということは辛抱が出来ない人だと思われる。よく考えて辛抱したほうがよい」と言いました。あれから30年、その時いた日立でずっと頑張っています。学校もあまり行ってないのにいろいろ資格も取り、えらいと思います。妹は大学を出て今では夫婦で起業をして頑張っています。第七回目は昭和62年4月16日に四女とその長男、長女でした。四女は来日三日目より中華街で一年間皿洗いをしてから桜ヶ丘職業訓練校に入れて頂きました。長女がここの前期の卒業生で先生方もご承知でお世話になりました。四女の長女は小学校五年生に弟は一年生に入れていただきました。長女は老人ホームで、四女は病院の厨房で現在も働いています。長女は2009年11月に、永年福祉で働いているとかで市長さんより表彰を受けました。第八回目は63年5月10日に四女の主人と次女と次女の二人の娘（長女、次女）と息子（長男）

の五人でした。六畳二間と四畳半一間に四女と二人の子供と四人だったところに、五人増えて九人になり県営住宅を申請するまで近くに古い家を借りました。私の家から少し離れているので、区役所に行って中古の自転車を五台かいました。孫たちは皆大きくなり自転車を欲しがっていたので、一台五千円で随分と助かりました。四女の長女は来る前は働いていたのですが中学校に入れて頂きました。初めは声をかけて下さる方もいたが、言葉が分からず返事もできないので誰も相手にしてくれなくなり、いじめにもあい、とても可哀相な時期もありましたが、よく頑張って学校に行ってくれました。素直で我慢強い娘で高校も卒業しました。来日して三日目頃私と一緒に買い物に行きました。一番最初に教えた言葉は「ありがとう」と「すみません」でした。孫はこの言葉を頭の中で一生懸命練習していたらしいんです。ところが人ごみの中で前の人のくつの後ろを踏んで、とっさに「ありがとう」が口に出たんだそうです。その人は変な顔をして後ろをふりむいたので、自分の言い違いにきづいたそうでいつまでも笑い話です。けどとっさに日本語が口から出たのはすごいことで「ありがとう」「すみません」は永遠に覚えられた一言でした。

ある時、八回目に来日した孫のちんとしまつ陳寿松の小学六年生のクラスに、三十年間町で日本人一人だけの暮らしをしていた話をしに行く日の事でした。娘を歯医者に連れて行くと先生が困っていらっしやいました。心臓の悪い残留孤児の奥さんが抜糸をして気分が悪くなったのです。すぐ

救急車を呼んで病院に行き、入院の手続きや、血液検査、尿検査、心電図等種々の通訳をしました。学校には1時に行くことになっていたのが急いで車で送って貰いましたが、一口の水をのむひまもなく口はカラカラ、教室は生徒さんに父兄の方まで一杯で、話の準備はしていたものもうそれどころではなく、何を話したか分かりませんでした。ハッと我にかえり気がついたらシーンとして皆熱心に私の話を聞いて下さっていたらしいんです。その後道で会うと私に挨拶をしてくれる人が増えました。先生は皆に作文を書かせそれを一冊にまとめて私に送って下さいました。私もいい記念品となり今でも大切にしまっています。第九回目は平成元年8月5日です。この日次女の主人が来日しました。残ったのは三女の家族だけになりました。三女は三歳ぐらいの時親切なおばあさんに預けたのですが、おばあさんが亡くなると子守として使われ学校にも行かせてもらえなかったのです。私は三女に対して申し訳なく、また今回最後になってしまったので、おわびの気持ちで泉州より出たことのない三女の家族と、娘達が来日する時手続きを全部やってくれた主人の弟夫婦にお礼の気持ちで、六人で桂林・広州へ旅行しました。それから第十回目に三女の家族三人が来ました。こうして十回に分けて皆日本に来ました。来るときは着のみ着のままなので、来る前に布団、毛布、シーツ、着るもの、はくもの全部を用意して待ちます。それらを何枚買ったことでしょうか。成田にも何回迎えに行ったことでしょうか。先に来た者が後に来た者の手伝いをして

くれるようになりました。娘達が来るたびに私の弟はお祝い金として十万円包んでくれました。有難いことです。昭和49年12月17日、三男と二人で日本に来てから現在53名になりました。でも私と一緒に来日し私と一緒に苦勞してくれた三男は四年前に亡くなりました。

[定年後]

昭和2年6月18日生まれの私は6月30日で定年退職でした。申請していた県営住宅に8月1日引っ越しました。やっと62歳でお風呂のある家に引っ越し、今までは六畳と四畳半だけでせまくて冷蔵庫も置けない台所でしたが、今度は六畳二間に四畳半、半間の物入れ、三畳くらいの板の間もあり、押入れも前の倍あり、前にも後ろにもベランダがありました。子供たちが泊まりに来て泊まれるようにしてあげたいと準備もしました。ガスストーブも二個、食器戸棚も買って、定年退職金で百万円近く買いました。その頃先輩のすゝめで病院の付添婦をしないかという誘いがあり、私はもう少し働くことにしました。半年ほど過ぎた頃、眩暈がおこるようになり、休み休み働いていましたが他の人の迷惑になるので残念ながら止めました。病院に行っても働きすぎだというだけなので中国で漢方で直そうと思い、泉州の名のある先生に診てもらい漢方薬を処方してもらい、スッポンを食べてみなさいということでした。私は何回か中国に行きスッポンを食べて帰りました。そうして少しずつ元気になりました。その頃です、私が中国に行くと、泉州の親戚や廈門の親戚だけでなく村の人達にもよく言われました。「西岡は男で

も出来ない事をした」と。私は「酒もタバコも吸わないからできたのよ」と笑いました。私のここ何年かの苦勞はみな認めてくれていたのです。私が苦勞して子供たちを皆日本に呼んだこと、中国に家を建てた事、等々皆無駄ではなかったのです。人数が多いので日本に着いてからも大変でした。孫たちの学校にも皆私が顔を出して先生に会いお願いしました。皆いい子でした。今は孫たちが一人前に家を買ったり、マンションを買ったり店を持ったりよく頑張っています。

*地名は日本語読み、人名は西岡さんをお願いしてルビをつけました。



弾んで・・・これから

中 和子

澄み渡った空に蝉
梅が何とも美しく、し
ばし見入ってしまう
このごろです。



皆様いかがお過ごしでしょうか？

70年前の8月、第二次世界大戦は終結しました。節目の今年は、各地でさまざまな関連行事が行われるようです。

ユッカの会にも取材申し込みがありました。ユッカの会は中国残留邦人の方々との関わりが強く、彼らとともに、平和のありがたさを考え続けてきました。この節目の年、これからも平和であり続けるよう祈ります。

2014年度は弾みをつけてと願ってのスタートでしたが、学習者とボランティア

の距離が縮まったことが印象に残りました。交流活動の場で積極的に活動を支え、ともに活動を盛り上げる姿がありました。

久しぶりに戸塚で行われた「ボランティア交流会」では、顔の見える場で和やかに話し合いが行われ、短時間ではありましたが、質疑応答の中で、活動の全体像をお伝えすることができたのではないかと思います。企画してくださった水本さん、木野さんに感謝です。途切れることなく次年度も実施したい企画と考えています。

2年目を迎えた「安全教室」は、7月に「119番通報・消火器の使用法を学ぶ」をテーマとし、座学だけでなく、体験重視の内容が参加者に喜ばれました。また12月の第2回は「大きな災害にそなえる～食・住・和～」がテーマでした。安全教室は回を重ねるごとに内容も充実。今回は地域の方々の参加も多く、食事の準備をする頃には、はじめて出会った方々でも、和やかに会話が弾み、協力し合って、素晴らしいランチ（災害食）が出来上がりました。講師の大尾さんも交え時間延長の有意義な集いだったと思います。地域の方々にユッカの会の活動を知ってもらう良い機会ともなりました。また、災害時、「自分の身は自分で守る」、公助に頼れない現実も知りました。

恒例の2泊3日の「ふれあいキャンプ」実施後、キャンプの「振り返り会」に集まったボランティア（大学生・高校生）からキャンプの楽しさ、意義について多くの発言がありました。キャンプで育った若者たちの成長に目を見張り、目頭を押さえるボランティアの方もいらっしや

いました。ボランティアの熱い思いがしっかりと子どもたちに伝わっているんですね。嬉しい「振り返り会」でした。

秋の「バス見学会」（マザー牧場）はお子様連れで参加された若いお母さんたちに大好評。バス1台では、参加希望者を全員受け入れられませんでした。急遽、乗用車を出して対応してくださった水本さんの行動力に脱帽です。

11月の「バーベキュー会」も若者主導の新しい試み等、工夫を重ね、内容の濃いものになってきています。バス見学会と同様、「今度は何時ですか？」次の開催を催促されています。12月には、遠い昔にユッカの会を巣立った若者たちと集い、困難を乗り越え立派に成長している彼らに励まされ、元気をもらいました。

「夏の教室」は立教大学三本松先生率いる学生に助けられ、ユッカの会ならではの1対1の手厚い対応ができたと思います。

「冬の教室」に関しては課題が残りました。ここ数年、市内に補習教室が増え、各区で対応するところが多くなり集中教室に参加する教室は減少してしまいました。特に冬の教室は2か所のみとなり、チラシ配布を迷ったほどですが、冬の教室のチラシを先生から渡された子どもが6人参加しました。やはり高校受験生や来日直後の子どもたちにとって「冬の教室」は必要なのですね。時期的にボランティアが集まりにくく、此方の対応が不十分であったことは否めません。ただ、冬の教室に参加できたことで、1月からの補習教室参加の足掛かりとなったことは実施する側にとって少しの救いでした。

「春の教室」は戸塚です。チラシを握って当日現れる子どももいると思います。受け入れる側として、これまでの反省を踏まえ、教室が参加者にとって有意義な時間となるよう工夫しなければと思っています。

このたよりが皆様のお手元に届くころには「春節を祝う会*1」があります。また2月には高校受験が待っています。1月年明け早々に「面接練習」(1月6日)、全員の合格を祈願し、残り少ない日々ですが効率よく学習できるよう担当のボランティアの方々は心を砕いています。

2月1日、西公会堂で「YOKE地域日本語教室事例発表会*2」が行われ、ユッカの会も参加します。是非皆さんもご参加ください。

2月後半には「成人を祝う会」、3月8日には「スピーチ会*3」、3月後半「理科実験教室」、「卒業を祝う会」と交流活動が続きます。

3月29日は前記しました初めての試み戸塚での「春の教室」です。2014年度の最後の活動です。

ますますお寒さがきびしくなりますが、活動を続けていると…気がつけば春…桜咲くあたかな季節到来ですね。

会員の皆さんのご活躍を心からお祈りいたします。

*1~*3は同封のチラシをご覧ください。



<これからの教室活動>

1. 補習教室（横浜・戸塚・本郷台）

問い合わせ：岩松文江（045-922-4987）、水本みゆき（090-6136-2457）

・集中教室（春の教室）3月29日（日）14:00～

フォーラム：男女共同参画センター（戸塚）会議室2,3

2. 日本語教室（横浜・戸塚・本郷台）

問い合わせ：木野美穂（090-5766-7853）

3. パソコン教室（横浜）

問い合わせ：中和子（080-5443-9441）

<これからの交流活動>

1. 春節の会 1月26日（月） 12:00～15:00（受付開始11:00）

中国残留邦人「しゃべり場」共催 横浜市技能文化会館

担当 中村（045-363-8440）、木野（090-5766-7853）

*同封のチラシをご覧ください。

2. 成人を祝う会 2月22日（日） 県民センター 703号室

担当：日向（045-571-6266）

3. 市民活動フェア2015 3月7日（土）、8日（日） 県民センター

スピーチ会 3月8日（日） 13:00～ 1501号室

担当：波多野（045-572-8237）、水本（090-6136-2457）

*参加者募集。同封のチラシをご覧ください。

4. 理科実験教室 3月22日（日） 10:00～ 県民センター305号室

担当 岩松（045-922-4987）、水本（090-6136-2457）

5. 卒業を祝う会 3月22日（日） 12:00～ 県民センター708号室

担当 岩松（045-922-4987）、水本（090-6136-2457）

詳細は、随時ご連絡します。ホームページもご覧ください。

ユッカの会ホームページ：<http://yukkanokai2014.web.fc2.com/>